# ヘミングウェイの戦争と恋

安　井　信　子

# War and Love in Hemingway

Nobuko YASUI

**キーワード**：戦争，恋愛，個人主義，死，関係


## 概　　要

ヘミングウェイは『武器よさらば』で戦争否定，恋愛喪失，個人の虚無を描いた．『誰がために鐘は鳴る』では一転して，大義の戦争，勇敢な死，悲恋を展開する．二十世紀アメリカの力と強さの価値体系の中で，他と分離した個人主義のもたらす虚無を，戦争と恋においてまさに力と強さで突破しようとした彼の誤りは，二十一世紀に必要なのは共生の思想であり，個人とその死を受け止めるアニミスティックなコスモロジーだということを教えてくれる．


## はじめに

ヘミングウェイ（1899―1961）といえば二十世紀前半の超有名人，釣と狩猟の名手，男らしさをうたうハードボイルドの世界を描いた作家であり，フェミニズムやエコロジーが叫ばれる現代では時代遅れと思われるかもしれない．しかし二十世紀のアメリカの特徴を最もよく表している作家の一人である彼から，今学べることは意外に大きい．二つの大戦を経験した彼は，生涯戦争とは切っても切れない縁があったが，それ以上に元来競うことや戦うことが好きだった．代表的な作品だけでなく彼の殆どの著作には，戦争，喧嘩，拳闘，闘牛，釣と狩猟（自然との戦い，あるいはライバルとの競争）など，何らかの戦いが描かれている．また彼は何度か猛烈な恋をして，四回結婚している．「巨木が倒れるように恋をした」と言われ，世慣れた二度目の妻は「恋をするのはかまわないけど，そのたびにいちいち結婚しなくてもいいのに」とこぼしたという．ある意味では非常に正直でまじめな人だったのだ．このように彼の人生は戦争と恋で満ちていた．ここでは戦争と恋を扱った代表的な二作『武器よさらば』と『誰がために鐘は鳴る』を取り上げてみる．

（平成13年9月6日受理）
川崎医療短期大学　一般教養
Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

## 1　単独講和と恋

『武器よさらば』は反戦的な小説で，戦争の悲惨さ愚劣さがリアルに伝わる傑作といえる．第一次大戦のイタリアで，主人公のアメリカ青年フレデリックは，戦友が爆弾で瞬時にちぎれた肉塊と化し，あるいは腐敗した死体の散乱する戦場を体験して，戦争で「神聖なものなど何も見たことはなく，栄光ありとされるものに栄光など皆無，犠牲とはシカゴの屠殺場のようなもので，ただ肉を埋めるという違いがあるだけだ」[1]と，大義名分の欺瞞を引き剥がした．戦略の誤謬，混乱，卑劣な行為，無意味な死に渦巻く退却のさなか，フレデリックはスパイの嫌疑をかけられ，銃殺される寸前に川に飛びこみ脱走する．きっぱりと戦争を否定した彼は，戦う「義務などもはやない」「怒りは一切の義務とともに川の中で洗い流された」[2]と感じる．雨に濡れ寒さと空腹に震えながら逃走するとき，彼にとって信じられるのは「食べて飲んで，愛する人に会いたい」という個人的な欲求だけだ．「義務」に従順であればただ殺されるだけという状況では，罠から逃れる動物のように本能的な感覚に戻るのは当然だった．

恋人キャサリンと再会した彼は「もう一人ぼっちではなく，ほかのことはすべて非現実的に思える」ほどの恋の喜びに酔う．脱走の罪を咎められて安全なスイスに逃亡すると，ゆっくりと二人だけの甘美な愛の世界に浸ることができた．しかし同時に「まるで学校をサボって遊んでいる子供が，学校では今何をしている

のだろうかと考えるときのような感じ」[3]に付きまとわれる．恋以外のことが非現実なのではなく，現実には戦争が続いているのであり，その現実からの逃避の上に二人の世界が建てられているかぎり，恋そのものが脱走の罪悪感に似た虚ろさと表裏一体なのだ．キャサリンは「私には何も宗教がない……あなたが私の宗教なの．あなたは私のもっているすべてなの」と言い，フレデリックは「以前は僕の生活はあらゆることでいっぱいだった．でも今は君が一緒にいてくれないと全然何もないんだ」[4]と言う．虚空の中で二人きりで自らを支える彼らの危うさ．二人が愛し合い一体となればなるほど，その恋の世界の空虚さが見えてくる．

不吉な予感は的中し，キャサリンは出産のとき出血多量で赤ん坊ともども死んでしまう．戦争から逃走し，義務を捨て社会を捨て，すべてを投げて恋の世界を作り上げ，あげくに恋人を失った彼にはもう何もなく，救いのない虚無の中に取り残されるばかりである．脱走という「単独講和（a separate peace）」は無効だった．他から切り離された(separate)状態では，一人であろうと二人であろうと人は孤独である．キャサリンの死はそのことをはっきりと明示するべく，作中ですでに予想されていたのだ．単独講和とは分離個人主義の謂いである．ヘミングウェイ自身，支配的な厳しい母親に反撥し，親と分離したのが十七歳，イタリアで戦争に参加，記者としてパリ，その後スペイン，アフリカとダイナミックに世界を飛びまわり，どこの土地とも有機的なつながりをもたなかった．故郷に戻らないばかりか，作品中でも故郷の町には一行も触れなかった．すべてから自由な個人としてアフリカの風を満喫しながら，「自分の人生を好きなところで好きなように送る」と高言した．こうして最大限に個人主義的生の充足を追求した結果，他から分離して自分一人の「個」のために生きることの本質的な虚しさを彼は痛感したのだ．「～からの自由」から「～への自由」に転ずる機は熟していた．

## 2　勇者の証明

『武器よさらば』から十年後に『誰がために鐘は鳴る』が出版されると，たちまち驚くばかりの売れ行きを示した．この作品はアメリカの青年ロバートがスペイン内乱に参加し，激しい恋をして，勇敢な死を遂げるという，かっこいいヒーローの物語である．前作で作者は戦争を否定したはずなのに，一体なぜこの主人公は自ら志願して戦争に赴いたのか．当時アメリカでは，スペインの共和政府を助けてファシストと戦うことは正当で有意義とされ，ヘミングウェイもスペインの人民と自由のため多大の資金を集めたばかりか，戦地にも足を運んで力を尽くした．この小説が出版されたときはすでに共和政府の敗北はわかっていた上に，ロバートの橋梁爆破の任務は成功するが，彼がその一部として任務を引きうけた大がかりな作戦自体は失敗に終わり，しかも逃走時に彼は砲弾に当たって死ぬという，何とも暗澹（あんたん）たるストーリーなのに，小説は爆発的に売れた．それは作品に幾重にも与えられている不確実，不安，恐怖，死，失敗という極度にマイナスの状況にもかかわらず，ロバートが毅然として義務を果たし，最期までひるむことなく勇敢で冷静に行動する，硬質の爽やかさと明るさが読者を魅了したのだ．いや障害が大きければ大きいほど，読者の目に彼の勇気は輝いて見えるのである．

ではロバートの勇気と平静さはどこから来るのか．任務を引き受けたときからその難しさに気づいていた彼は，当然不安を感じていた．しかし「作戦を考えるのは自分ではない．自分はこの任務を成し遂げればいいのだ」[5]と自分に言い聞かせ，着々と遂行していく．この小説には「義務」「任務」「命令」「大義」「……ねばならぬ」という言葉が頻出するばかりか，ロバートはスペイン人に「死ぬことが怖いか」と聞かれて「死ぬのは怖くない．義務を果たさないことが怖い」と答えるのである．彼の沈着ぶりはその「義務」によって支えられている．『武器よさらば』の戦争と違ってこの戦いには意義があり，義務は正当だという一点によって保たれている．しかし一介のスペイン語教師でありプロの軍人でもないアメリカ人が，スペイン内乱に命をかけるのは唐突といえるのではないか．またこの任務は本当に彼の命をかけるに値するのか，彼の言う「義務」にその必然性はあるのか．こういう疑問を感じる暇を与えないのは，作品の描くたった三日間の戦いと恋と死の緊迫，集中，密度である．五百ページもあるこの大作をヘミングウェイは一気に書き上げたというが，読む方も一気に読み進みあっという間にヒロイックな死の結末を迎えてしまう．集中度を保つよう三日間に限定するため，主人公の死は必要不可欠であって，彼が生き延びれば作品の構成が成り立たないのだ．

ロバートの祖父は南北戦争のとき非常に優れた兵士であり，彼の心の手本となったが，反対に父は妻の尻に敷かれる弱い男で，皮肉にも祖父の形見のピストルで自殺し，「男の恥」としてロバートに深い傷跡を残し

た．これはヘミングウェイの伝記的事実とほぼ一致している．何としても父のように「臆病者」に堕してはならない，祖父のように「勇者」にならねばならない．最終的な勇者の証明は死を前にして平静であることだ．意識下でそう決意したロバートに，大義のため人民とともに戦うスペイン内乱は格好の舞台を提供してくれた．義務が正当性を保証してくれ，己の「個」を投入でき，人々と一体になれる戦争で，勇敢な死を遂げること，これ以上の勇者の証明はない．こうしてヘミングウェイにとって勇敢な死が最大の関心事となり，その機会である戦闘や危険を彼は生涯求め続けた．分離した「個」の虚しさから誰しも脱却したいし，自己にとって真に大切なもののために献身したい気持ちは誰にも潜んでいる．だからといって死に急ぐ必要はない．しかしヘミングウェイは「個」の孤独と凋落の恐怖を，義務という形の死で自ら断ち切ろうとした．

『誰がために鐘は鳴る』の恋は，はじめから死によって引き裂かれ，悲恋として完成する運命だったことがわかる．『武器よさらば』ではキャサリンが死んで主人公が虚無の中に取り残されるが，この小説では逆に恋人マリアを逃がし主人公が立派な死を遂げる．二人の恋の過剰な純粋さ，激しさと，マリアが余りにも男に従順な人形のような女性であることは，よく批評家から指摘されているが，もともと重要なのは恋ではなくヒーローの勇敢な死であったのだ．確かにロバートはマリアを心から愛しているし，二人は類まれな幸福の瞬間を経験するが，二人が語り合うのを聞くと，マリアが彼に従い彼の身の回りの世話をする話ばかりで，二人でともに生きていくという内容は全く出てこない．あからさまに言えば彼女を連れて人生で楽しい思いをしたい，美人で魅力的な彼女を傍らにおいて自分の人生を（二人の人生を，ではなく）楽しみたいというのがロバートの本音である．読者をぐんぐん引き込むこの悲恋は，実は彼の勇敢な死を飾る美しい花にすぎないのだ．

## 3　戦争と恋と個人主義

勇者，強者，勝者が栄誉を受けるパワー信仰の二十世紀のアメリカで，酒と喧嘩に強く，スポーツが得意，ノーベル賞まで受賞した成功者ヘミングウェイは人気があった．彼がその作品の中で戦いを描き続けたように，二十世紀は二つの世界大戦をはじめ幾多の戦争に満ちていた．戦争と恋には共通点がある．戦争には闘いのヴァイオレンス，恋にはセックスという，自我を根底から震撼させる要素がある．それは場合によっては自我の枠を打ち破り人を成長させる契機にもなり，あるいは人を破滅させる原因にもなる．戦争は死を前にしてともに闘うという連帯感と，家族や祖国への愛を顕在化させ，恋は自分の「個」を超えるような一体感，自己放下をもたらすことがある．同時にどちらも相手を意のままに支配する権力欲を呼び起こす，強烈な刺激にもなる．あらゆる既成の束縛から自らを解放した個人が，「個」の存在の虚しさに直面するとき，そこから注意をそらしてくれる戦争と恋に身を投じるのは理解できないことではない．しかし戦争も恋も決してその解決にならないことは明白だ．戦争は敵を前提とするが，多くの場合敵とは自分のシャドウの投影であるか，相互の関係が統合できず分断されて起きる現象で，しかも戦争を望まない者，女性，子供，非戦闘員が悲惨にも数多く殺される．戦争が分離個人主義の虚無を解消することは本来ありえない．

では恋についてはどうか．恋愛が近代西洋でここまで持ち上げられたことには歴史的必然性があるといわれている．中世騎士道において，騎士が貴婦人にすべてを捧げて相手と結ばれたいと欲しつつ肉体関係をもたないというコンセプトが尊重されたが，近代化とともに神が後退すると，不可能となった神との合一に代わって，恋する異性と合一し二人が永遠に結ばれるというロマンティック・ラヴが神聖視されるようになった．こうして宗教的経験と恋愛感情が混同され，恋愛イデオロギーが広まったのである．だが，いかに恋する相手とはいえ，生身の人間に神の役目ができるはずがないから，その本質上永続しない（持続するとすればより広い愛情へと変質する）恋は，永遠を求める魂の希求である宗教の代わりにはなりえない．それどころか，人々が恋愛至上主義で結婚するはずの欧米で，今ドメスティック・ヴァイオレンスが大きな問題になっている．現在，カップル単位，核家族の社会では，個人や家族関係の問題解決を援助する受け皿がないため，問題や不都合を強者が弱者に（つまり男が女に，親が子に）転化して暴力を振るう．感情や個人という不安定なものを基盤にして，「個」を受け入れる安定した永続的な容器を作ることはできないのである．

西洋と日本の間で個人主義の問題を探求する河合隼雄氏は，「個人主義の『個人』をどう考えるか，は世界の問題であると思う．個人の能力や欲望を伸ばすことを第一に大切なことと考える．それはいいとして，そのためには少なくとも二つの点に対する考慮が必要で

ある．それは，他人との関係をどう考えるか，という点と，自分の死をどのように受けとめるか，という点である」[6]と述べている．ヘミングウェイは他者との関係も死も，勇者という視点のみから見つめ，余りにも偏った世界を作り上げた．西洋の英雄神話は「英雄の誕生」「怪物（竜）退治」「女性（宝物）の獲得」から成り立つが，ノイマンによればそれは西洋的自我の確立の過程を表す．『誰がために鐘は鳴る』のヒーローは，由来なくスペインに現れ，橋梁は爆破するものの砲弾に倒れ，マリアを逃亡させて一人死ぬ．つまり英雄の誕生，怪物退治，女性獲得の三つのいずれにも適合しないのである．これは単に作品やヘミングウェイ個人のことだけでなく，近代西洋的自我の終焉，といって悪ければその変革を示しているのではないか．

生前のヘミングウェイは競争と戦闘好きのマッチョだったように思われていたが，実はたいへん繊細で傷つきやすい人でもあった．特に遺作の一つ『エデンの園』が出版されてから，彼の内なる女性性やセクシュアリティの越境が注目されるようになっている．男の定義が強さと力であった当時は，彼の内部でそういう要素は抑圧されていたのである．このような自己内部での分断と，他者との分離とは根を同じくするものである．分離個人主義で生きようとするかぎり，「個」の不安と虚しさを免れることはできず，多くの戦争と恋に見られる暴力と逃避を招く．勿論戦いや恋がすべて悪いというのではない．スポーツや武術に見られる戦い――他と競うことにより自他を磨き，己と戦うことにより自己を高める類いの戦いに，全力で打ちこむことはすばらしい．しかし戦争はそれとは全く別物であり，ただ自他を破壊するだけだ．また恋をして最も濃密で厳しい人間関係を体験し，さらに成長していくことは重要である．ただし戦いも恋もプロセスであってゴールではない．だがヘミングウェイはそれを自己のヴァニッシング・ポイント（消失点）にしてしまい，強さの個人主義の誤りを，身をもって教えてくれたのである．

## おわりに

西洋個人主義と恋愛イデオロギーは二十世紀に世界的に広がったが，「個」の確立やカップルの成立は決して最終目標ではない．そもそも「個」とは何か，そして例外なく死ぬ「個」を支える根本のものは何かを問うべきである．現在西洋でも，個体間のつながりあう全体の調和に目を向ける，「共生」の思想が静かな勢いを得ている．日本では，「人間は自分の力だけで生きているのではない，生かされているのだ」という，アニミスティックなコスモロジーや，他力系，非力系の思想が注目され始めている．今後「個」を受け入れ抱きとめる二十一世紀の受け皿を探求するにあたって，これは大きなヒントになるのではないだろうか．

## 文　献

1）～4）Hemingway E：A Farewell to Arms, London：Arrow Books, 1994.
5）Hemingway E：For Whom the Bell Tolls, London：Arrow Books, 1994.
6）河合隼雄：日本人という病，東京：潮出版，1998.